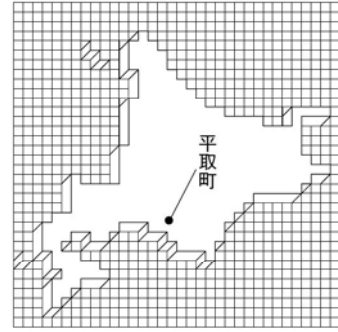


— 連 載 —



あのマチ
このムラ
・地域おこし活躍中

平取町の事例

—すずらんとユーカーラの里

びらとり—

一・はじめに

平取町、町名の由来であるアイヌ語のピラウトウル（ガケの間にある所）が示す通りの地勢、位置的には、浦河から国道二三五号線を西へ札幌方面へ向かう途中富川から国道二三七号線を少し北東へ、国道二七四号線に向かう入口にある。温暖な気候で農業を

営む環境としては好適である。

平取町は“ニシパの恋人”と“びらとり和牛”があまりにも有名であるが、この町の特徴は何と言っても新規就農者が多い、育つ、地域に溶け込んでいく点にある。

農家戸数の減少が著しく、担い手確保対策が叫ばれて久しいが、平取町の成功要因は何なのであろうか？ トマトの収益性の高さ、ニシパの恋

人というブランドとその安定した生産・販売基盤があるのは間違いないが、新規就農を目指す

上で、平取町のどこが魅力なのか、新規就農者の高い定着率の要因



（ピニールハウスの風景）

No.71

年度	生産者戸数	作付面積 (ha)	販売金額 (千円)	主な出来事
平成3年	65	15.2	390,643	100%桃太郎に品種変更。
平成12年	159	79.6	2,161,508	トマト販売高20億円達成記念式典。第30回「日本農業賞大賞」受賞。
平成23年	164	119.1	4,110,502	過去最高の出荷量と40億円突破。トマト栽培を始めて40周年を迎える。
平成24年	166	118.9	3,901,087	2年連続1万2千トンを超える出荷量となる。

(びらとりトマト栽培40周年・販売高40億円達成までの変遷(平取町野菜生産振興会トマト・胡瓜部会)より抜粋)
(注)“びらとりトマト”は平成24年に地域団体商標登録された。

はどこにあるのだろうか？

二・トマト栽培の経緯

昭和四七年に米の転作作物としてトマトハウス栽培を六戸で始めた。今や一六六戸、作付面積一八・九ha、販売金額三九億円となっている(平成二四年度)。

平成一〇年から開始した新規就農者の受け入れは二四年度までに一五戸に達し、リタイアもなく高い定着を示し、トマト生産面において生産者戸数を減少させることなく着実に販売高を伸ばしてきた。



三・平取町地域担い手育成センターが取り組む新規就農対策

町の農業振興を推進するために、平取町農業振興対策協議会(現・平取町農業協議会)と町・農協等の関係機関の連絡組織)の専門機関として平成元年一月、「平取町農業経営センター」が設立された。運営経費は町・農協・土地改良区の負担金で賄われ、職員は町から出向している。平成七年より地域担い手育成センター活動を開始、同一〇年より新規参入希望農業研修生の受け入れをしている。同一六年、事業所名を「平取町農業支援センター」に改称した。農業に興味を持ち、新規就

農を志すといつても、実現するには資金、就農地、営農技術、経営のノウハウ、住居など克服すべき課題は諸々あり、それをクリアするための制度、教育、施設等が必要である。

平取町では、約八か月間の農家研修の後、実践農場で一年間受入農家の指導を受けながらトマトの実際栽培を行い、就農するための技術を習得する。

(一) 資金面での支援内容

・北海道農業担い手育成センターの支援対策(研修時の支援)

『認定就農者^{注2)}』を支援対象とし、

① 就農研修資金(一五万円/月、二年間まで)

② 就農準備資金(二〇〇万円、就農直前一回のみ)

③家賃助成、大型特殊免許
取得支援

(①②については一経営体で
五年間以上就農すると償還金
が一部免除される)

(注2) 就農しようとする人が地域担い手セ

ンター等の指導を受けて就農計画を作成し、

認定計画を知事に提出して認定を受けた青年

・平取町の支援対策(平取町
新規参入者就農促進対策事



(実践農場)

業)

①就農時に農業施設、機械
等の購入資金の1/2を
助成(上限金五〇〇万
円)

②研修期間中、賃貸住宅の
斡旋、家賃の1/2を助
成(上限月額一五、〇〇
〇円)

③機械化研修、経営研修
(本別町農業大学校)受
講費用の助成

(二) 研修施設(実践農場)

町では実践農場を設け、び
らとり野菜のクリーン農業技
術向上を目的に、各種試験栽
培に取り組んでいる。その試
験栽培の管理を新規参入希望
農業研修生が担当し、作業手
当を支払っている。平成十二
年に『北海道元気づくり事
業』の補助を受けて紫雲古津

実践農場が建設され、多くの
農業研修生が研修に励んでき
たが、同二三年には『北海道
地域づくり総合交付金』およ
び(公財)北海道農業公社の
『研修生受入環境整備支援事
業』の活用により振内実践農
場が建設され、町内二カ所の
実践農場となり、各農場一戸
ずつの研修生受入が可能と
なった。

(三) 農業研修生住宅の
建設

町では毎年二戸の農業研
修生を受け入れているが、
今まで研修生の住宅は、農
家の空き住宅や教職員住宅、
町職員住宅で対応してきた。
しかし、その年によって確
保状況が不安定なこともあ
り、地域の農業者から強い
要望があつた農業研修生住

宅を平成二四年一月に振内
地区に建築した。木造の一棟
二戸(三LDK)平屋建てで、
木を活かした使いやすい住宅
である。住環境が整備された
ことにより、一層充実した研
修生活が送れるようになった。
本町地区にも平成二五年に一
棟二戸の農業研修生住宅の建
築を予定している。



(ハウス内収穫作業)

（四）就農プランの作成

いよいよ就農時には、就農プランを策定することとなるが、農業機械及びビニールハウス八棟、一、二〇〇坪経営規模では、初期投資として平均約四千万円必要となる。前記の資金支援、助成等があると言ってもハードルは低くない。町では、新規就農モデルプランを例示している。

四・町の現状

「少子・高齢化や、生産年齢人口の都市部への流出による過疎化は平取町のまちづくりのあらゆる分野で深刻な問題を投げかけています。人口の推計によると平成一七年度六、二三人の人口が平成二七年度には五、六七〇人になり、高齢者人口比率も三〇・

七%になると予測されています。平取町が行う施策や事業のほとんどが過疎化に歯止めをかけるためのものと言っても過言ではありません。日本全国が人口減少の社会になっていくことや、過去の実態からみて、人口の増加目標を設定することは無理があるものと判断し、特に産業分野での雇用の確保に力点をおき、定住化対策を進めながら、一人でも人口が減少しない施策を展開することに努めることとします。」（第五次平取町総合計画（二〇〇六～二〇一五）より）

平取町においても、過疎化の歯止め対策は避けて通れず、町の主要な産業である農業の担い手対策は町の存続にかかわる問題である。

五・受け入れる側の姿勢

以下は平取町地域担い手育成センターのHP上での呼びかけである。

「小規模で大型機械を必要とせず、価格も安定しているトマトは新規就農に最適です。」

「平取町のトマト栽培では、大型選果施設の完備により販売システムが整っており、共同育苗施設、土壌診断施設、研修実践農場、営農指導体制などの支援システムも充実。そしてトマト農家一六六戸は新規就農者をとっても好意的に受け入れています。」

「良い作物と支援体制がいくらか充実していても、新規就農は簡単なことではありません。」

「平取町では、自己資金があり多少の困難があっても乗り越えられる、本当に農業をやっていきける、意欲ある元氣なご夫婦を募集しています。」

町は諸手を挙げて、来る者は拒まずという対応はしていない。

現在は一年間に二戸の受け



（北海道就農相談会・平取町ブース）

入れを基本としているが、応募が上回れば、当然選考となる。そのポイントは、就農に対する意欲、自己資金力、年齢などがあるが、必須条件は「家族」であること。「トマトは大型機械を必要とせず、小規模から始められるので、新規就農に向いています。ただ、手間ひまがかかる作物なので、奥さんや家族の協力なしには難しい」とのこと。

「人生をかけて来てくれるわけですから、受け入れる私たちも真剣です。研修先の農家をはじめ、トマト農家がみんな協力的なので定着率が高いのではないかと思えます。」（平取町農業支援センター 斉藤センター長）

六・応募側の動機

香田文雄さん（大阪市出身、平成一四年就農、（公財）北海道農業公社の平成二二年度新規就農優良農業経営者優秀賞受賞）の場合、前職は毎日朝五時から夜一時までの仕事の繰り返しで、子供の寝顔しか見ることができない日々だった。人生これでいいのだろうかという疑問、北海道への憧れ、農業への興味、これらが重なり、悩んでいるときに大阪での北海道新規就農相談会で、平取町ブースとの出会いが新規就農へのきっかけだったとのこと。

香田さんは平取町での新規就農を決意し、それから研修に入るのに一年を費やした。それは就農のための準備と農

業に対する熱意を関係者にアピールし、夢を結実させるために要した期間であった。

香田さんは晴れて自立し、経営が軌道に乗った平成二

〇年に大病を患い、約半年間の入院、静養生活を強いられた。この間、地域の人たち、新規就農の仲間達に助けられた有難い経験をしたとのこと。その後の北海道農業公社の新規就農優良農業経営者優秀賞受賞であった。



（ネオフロンティアのメンバーと家族）

平取町に來られた全ての新規就農者の方々の事情を追いかけると、それぞれの重い人生の転機、決断、新たな試み

における困難、忍耐、努力、そして歓びという深い物語があるのだということを知らされる。

七・研修生及び新規就農者を支える町内の各組織

平取町の新規就農した新たな担い手農家は、自分たちがしてもらったように、地区の農家と協力し、新たな仲間づくり、その具体化、支援対策を行い、もって地区の活性化を図ることを目的として、「新規就農者受入協議会」等を設置している。本町地区には、「アンビシヤス」(平取町本町地区新規就農受入協議会)、振内地区には、ふれないう就農者受入協議会「ネオフロンティア」があり、アンビ

シヤスは平成二五年度町民税一%まちづくり事業において、「平取町で農業を！」夢・実現プロジェクト」が採択され、新規就農相談会に出向き、相談者に生の声で相談にのっている。



(ニシパの恋人の箱詰)

八・おわりに

受入側の町、J A、既存農家等、周囲全てのあたたかい支援、協力が新規就農者の自立を導き、地域農業の担い手となっていく。その基盤にはJ Aによる共同選果があり、トマトの規格を統一し、『ニシパの恋人』という市場に評価された大ブランドがある。新旧農家共々に生産に励み、生活を謳歌していくというこの平取町の成功事例は、素材環境は異なるが、道東の酪農家の「一人勝ちは結局産地を縮小させ、自らも減ぶ結果となる」という言葉と軌を一にしているように思える。集約的な施設園芸作についての新規就農対策は平取町が一つの道筋をつけている。水

田作、畑作、畜産地帯はどのように地域を継続していくのだろうか？

【取材後記】

トマトの生産がこれほどまでに伸長したのは、ひとえにトマト農家が一円でも経費を切り詰めようと爪に火をともしような努力の積み重ねの賜物であるとのこと。

高台から、陽光を浴びて光り輝く、いらかの波の様に連なつたハウスを眺めやると、「頑張れよ」と元気を貰えるような気がする。私はお返しに「びらとりトマト」の更なる繁栄を願う。

一般社団法人 北海道地域農業研究所
特別研究員 西野 義隆